

2023年5月の選評に代えて 高橋修宏

棺 火を絶やさないための伐採 (合川秋穂 東京都)

屋外での火葬の光景だろうか。だが、「伐採」という言葉のもつ強度によって、ただの火葬では済まない世界を暗示させているようだ。もしや「棺」に収まっている者は、われわれ人類自身なのかもしれない。

春の坂のぼればのぼるだけ伸びる (立花ばとん 東京都)

もしや、夢の中の「春の坂」なのか。不思議な感触の一句。くり返される五つの濁音も効果的だ。どこか明るい悪夢のような気配は、やはり「春」という季節がふさわしい。

腕相撲にしては焦げ臭くないか (松下 誠一 東京都)

一読、面白く、考えさせる一句だ。はじめは、「腕相撲」のような他愛もないゲームでも、どこかの時点＝エントロピーで「焦げ臭く」なるものかもしれない。現在における戦争のメタファーであり、カリカチュアとしても受け取った。

密告は菜の花畑のすみっこで (ビスコ 愛知県)

おぞましい「密告」と、「菜の花畑」の明るさとの対比。この一句が想起させるものも、現在の戦争の光景のひとつではなかろうか。

漱ぐ 言葉貧しくして光れ (中矢 温 東京都)

どこか〈漱石枕流〉の故事とエコーしながら、「光れ」の一語によって立っている。おそらく「言葉」というものは、豊かでも自由なものでもない。そんな貧しさに相対しながら、己

れのだけの「言葉」を探し、つむぐのが詩の行為なのかもしれない。

名前からいきものになる (からすまゑ 神奈川県)  
立ち上がる影に問いかけながら  
走った

「名前」をつける、そして呼ぶという行為を通じて、その存在は輪郭を与えられ主体として現われる。どこか抽象的な思弁に見えながらも、「問いかけながら／走った」にリアリティが宿る。

さよならのらが聞こえない走馬灯 (小林紅石 埼玉県)

「さよなら」という聞き慣れた言葉を微分化した異色作。その「ら」が聞こえないほど、作中の「走馬灯」は早いものなのか。

「人類の敵」に人名麦の秋 (奎いう子 佐賀県)

痛烈なアイロニーが効いた一句。その「人名」は作中では明かされないものの、「麦の秋」の斡旋によって広大なウクライナの穀倉地帯さえ連想させる。

弦切れてラインハルトの忌に雷雨 (田崎森太 東京都)

(1953年5月16日没)

J・ラインハルトと言え、ジプシーギターの奏法をジャズに持ち込んだ偉大なギタリスト。その名前は、MJQの曲名にもなっている。「弦切れて」と「雷雨」の響きあい、鮮烈で印象的だ。

朧夜の黒子が動き出しそうに

(吉沢 美香 宮城県)

すでに、どこか妖しいイメージを帯びた「朧夜」は、なかなか手強い季語のひとつ。この一句では、身体の「黒子」という極小なものとの取り合せにより、あっさりと感覚的に描いた。

まだたましいに

(こはくいろ 大阪府)

ならないところがかゆい

一読して、面白く感じた作。「たましい」という漠然とした存在と、「かゆい」という身体的な感覚が取り合わされることによって、おかしみある実感を表出させている。

十六階から見えないこいのぼり

(加藤 万結子 愛知県)

〈摩天楼より新緑がパセリほど〉という鷹羽狩行の代表句があるが、この一句では「十六階」と視点が特定されている。「見えない」と断定されることで、却って「こいのぼり」が見えてくるように感じた。

未来から来ました

(香取小春 宮崎県)

銀の鹿を追って

「銀の鹿」とは、何かを象徴するものなのだろうか。それが明かされていないにも拘らず、「未来から来ました」という不思議な挨拶と共鳴・共振しているようでもある。

春服を猫の陣地にされて昼

(玻璃 愛媛県)

猫を飼っていると、こんな状況は〈あるある〉ことのひとつ。〈ああ、どうしようか?〉と困りながらも、猫を見つめる優しげな眼差しが伝わってくる。「春服」と「昼」という明るいイメージも印象的だ。

夏の藍色の脱皮をする空を

(真島しましま 千葉県)

さわれないペンギンが泳いでる

夏の空を見上げたとき、「脱皮する空」を見つけたときのファンタジーだろうか。一読、シユールな光景でありながら、どこか童話的な長閑さも伝わってくる。